

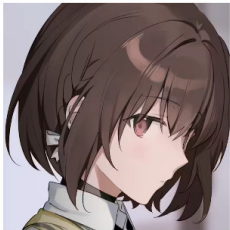


わたし、二番目の彼女でいいから。【バレンタイン特別掌編2022】

西 条陽/Re岳

BPまたはCのみで閲覧可能

2020年代前半



【バレンタイン特別掌編2022】
ノベコミ特別配信！



×	パーフェクトバレンタイン-4	⚙
ひとしきり早坂さんとキスをしたあと、今度は橘さんに同じことをする。		
俺はもう遠慮なくふたりを比べる。		
早坂さんとの口は熱くて湿っていて、漏けるようなキスだ。一方、橘さんの口は小さくて、強く締めつけられるような快感がある。		
キスをしているうちに、橘さんのデンションがあがっていく。		
頬がどんどん赤くなり、息も荒くなる。		
橘さんは犬になりたがりたりする傾向があるから、こういう状況はかなり好きかもしれない。		
俺はサディスティックな気持ちになって、その白い太ももを強くつかんでみる。		
突然の刺激に、橘さんの体は面白いくらいに反応する。驚いて、戸惑って、興奮している。		
暗闇のなかで、彼女は次に自分がなにをされるか想像力を飛躍させている。		
橘さんの意識がトンだのがわかった。		
息が震れている。		
口を離してみれば、ピンク色の舌が求めるようにつきだされる。		
俺はその舌をつまんでみる。		
軽く引っ張れば、橘さんは少し苦しうにあごをあげる。		
涎が垂れて、太ももに落ちた。		
俺たちのバカになった空気を察したのだろう。		
「桐島くん、私もお」		
早坂さんもあごを上げて口をあけている。		
俺は早坂さんの望み通り、そこに指をつっこんだ。		
音を立てて、早坂さんが俺の指を吸い始める。		
ふたりは目隠しをして暗闇の世界にいるから、羞恥心というものがなく、自分が立てた音でどんどん興奮していく。		
俺はそんな彼女たちの口を思うがままに弄んだ。		
しかし、やはり彼女たちのほうが先にいこうとする。		
早坂さんがバランスを崩して、ソファーの上に横になってしまう。後ろ手に縛られているから、自分で起き上がることができない。乱れたスカートのまま、いう。		
「いいよ、桐島くんの好きにしていいいよ」		
橘さんも、甘い吐息を漏らしながら、口をあけていう。		
「私、なにもみえないよ。だから、口のなかに、なにいれてもいいんだよ。司郎くんがいれたいもの、いれていいよ」		
◇		
三人で反省会をしている。		
部室の窓の外をみてみれば、周囲はすでに暗い。		
あれからいるいるあった。		
そして俺たちは今、強烈に反省している。		
「もう、今日が何の日とか関係なくなっちゃったね」		
早坂さんが困ったように笑いながらいう。		
「わ、私は、もっとかわいいバレンタインにしたかったのに……」		
と、後ろ手に縛られて一番喜んでいた橘さんがいう。		
「恋愛ノートはあまり使わないほうがいいな」		
俺はそういつて引き出しの奥深くに恋愛ノートを隠すように入れる。		
そしてそろそろ帰ろうかとしたところで、窓の外から雨音がきこえはじめる。		
どしゃ降りで、こやみになるまで待ったほうがいだろうという話になる。		
三人でソファーに座って、スマホをさわったりして時間をつぶす。		
時計の秒針が進む音。		
やがて、橘さんがもじもじしながらいう。		
「……雨がこやみになるまでさ、少しだけさっつつづきやらない？」		
やれやれ。		
俺はふたたび、目隠しを手にとった。		